

STAGE 2

文学的文章 I

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたし（さくら）と梨利はいつも行動を共にしてきたが、ある時、わたしが梨利を裏切ってしまい、二人の関係は閉じてしまった。そんな中、わたくしが心の支えにしていた年上の智さんまでも、現実逃避し、地球を脱するための宇宙船のことばかりを考えるようになる。この状況を見かねた勝田くんが、自ら古文書をつくり、発見したかのようにわたしと智さんに伝える。そして、そこに書かれた一九九八年最後の満月の夜、智さんが突然姿を消してしまう。

一九九八年 最後の満月の夜

水城小学校の屋上に

真の友

四人が集いし その時

月の船

舞い降り 人類を救う

すると人類は もう宇宙船を造らなくてよくなるであろう

水城小学校は、たしかにあたしたちのもと母校だ。けれどあたしたちはたった一年間しかあの学校に通っていない。あたしたちが小学二年生にあがった春、水城小学校は生徒の激減と校舎の老朽化にともない廃校となつたのだ。その後、再編成された学区に従つてあたしはニュータウンの新町小学校へ、梨利と勝田くんはとなり町の竹中第一小学校へふりわけられていつた。

役目を終えた水城小学校は、噂だと、その一帯に造られる予定だった巨大なレジャーランドへ吸収される運命だつたらしい。ところが、まだ解体工事も始まらないうちにバブルが崩壊。そのまま計画は無期延期となつて、水城小学校はいまだに老いぼれた姿をさらしているわけだ。

街外れの暗がりに眠る朽ちた校舎。野菜畑や雑木林の広がる周辺には、その

眼りをさまたげる人影もない。

でももちろん、それは本当に月の船が下りてくればの話で……。

「勝田くん！」

ひたすらペダルをこぐ勝田くんのうしろで、あたしは大変こまつたことを思いだしてしまつた。

「月の船、どうするの？」

「え」

「月の船なんか来ないのに、どうするの？」

勝田くんはスピードをゆるめずに「しようがないよ」と笑つた。

「しようがない？」

「だって、来ないもんは来ないんだから」

「そんな無責任な……」

「あのさ、オレ、智さんは月の船が来なくても傷つかない気がするんだよ」

突風に傾いた車輪のバランスを立てなおしながら、勝田くんは懸命に前へ、前へとつきすんでいく。

「智さんだつてあんな古文書、最初からせんせん信じてなかつたし、今だつて、たとえ水城小にいるとしても、ほんとに月の船が来るなんて思つちやいないと思うよ。でもきっとほかに、行くあてがないんだよ。ノートめちゃくちやにして、宇宙船ぶつ壊して、これからどうすりやいいのかわからないつてときには偶然、あの紙を見つけたんじゃないのかな。だから月の船が来なくたつて傷つかない」

だけど、と勝田くんは言つた。

「だけどオレたちが行かなかつたら、たぶん智さんは傷つくんだ」

びゅう、とひときわ激しい風に再び車輪がぐらついた。

あたしは古文書の予言を思いだして、そういえば……とつぶやいた。

「真の友が集まるとか書いてあつたっけ」

「そ。真の友四人が集いしそのとき……」

「あ」

—あ

勝田くんがブレーキをかけた。車輪がつんのめるようにして止まり、今度こそ地面に投げだされた。イタ、と腰を押されたわたしの横で、しりもちをついたまま勝田くんは言つた。

「やべ。ひとり足んじゃない」

五分後、あたしたちは街角の電話ボックスにいた。大通りから外れた近道を行つていたため、公衆電話を探すのもひと苦労だった。

「ね、どうしても四人じゃなきやいけないの？ 三人じゃだめ？」

受話器に手を伸ばす勝田くんに、あたしはしつこく食いさがつてみたけど、「だめ。四人つて書いたんだから、絶対、四人だよ」

と、² 勝田くんはゆづらなかつた。

「でも、どつちみち月の船は来ないんだし」

「だからキーワードは『月の船』じゃなくって『真の友四人』なんだつて。それにあの古文書はもともと智さんのためだけに作つたわけじゃないんだから。さくらと梨利のためでもあるし、ひいてはオレのためでもある。やっぱ四人じやなきや意味ねえよ」

怒ったように言うなり、勝田くんは梨利の家の番号を押した。

思つたとおり、³ 梨利の反応はぶつかつた。例の事件以来、学校にも登校せず、勝田くんの面会も拒否している梨利が、そんなに簡単に呼びだしに応じるわけがない。「大事な話なんです」「人の……いや、人類の未来がかかるてるんです！」などと勝田くんがおばさんには熱弁をふるい、なんとか梨利を電話口までつれてきてもらつたまではいいものの、人類の未来がかかつてているはずの勝田くんの話は、梨利の耳にはとうとう荒唐無稽なものに響いたはずだ。

「たのむ！ どうしても四人必要なんだよ」

「水城小の屋上。おまえんちからなら近いだろ」

「だからその屋上に月の船が……」

「来ねえよ、月の船は来ねえけど、でもとにかくそういう予言なんだつて」

「いや、ノストラダムスじゃなくつて、勝田尚純の予言なんだけど……」

力説されればされるほど、梨利はますます混乱していくはずだ。さつぱり

要領を得ないままに時間だけが過ぎていき、勝田くんのとなりであたしはだん

だんじれできた。

電話ボックスのガラスごしに見える満月。風が黒雲を運んでくる中で、あの青白い光はいつまで地球を照らしているんだろう？ 満月が消えたら智さんはがっかりして帰つてしまふかもしれない。今度こそ地球に絶望して、せっかく

してたかもしれない宇宙船の世界にもどつてしまふかも知れない。

「ん、さくらもいるよ。一緒におまえのこと待つてるから。こんな機会でもなきやおまえら一生、このままだぞ」

勝田くんの声も次第にいらだつていく。

「ああ、言われなくたってわかるよ。どうせオレはおせつかいだよ。人のことばつか気にしすぎてんだよ。でもな、オレから見りやおまえたちみんな、自分のことばつか気にしすぎてんだよ」

受話器にむけられたその言葉は、梨利だけじゃなく、あたしへの非難でもあつたはずだ。たしかにそのとおりだと、胸にずんときた。

あたしはこれまで自分のことばかり気にしすぎていた。それもうんと小さな、どうでもいいところで。

「なあ、いいかげん仲なおりしろよ、ふたりともなにこだわつてんだか知んないけど」

月から見れば塵のようなこだわり。

「ほんとにどつちも意地つぱりだよなあ。おまえら似た者どうしのいいコンビだよ、オレが保証する」

それくらい保証されなくても知つていて。

「もうすぐ一九九九年も始まる。今こそみんなで手と手を取りあつて……」ちがう。そんなにむずかしい言葉じやない。ほんの少しの勇気さえ出せば、あたしはもつと簡単に梨利を求められるんだ。

「貸して」

あたしは勝田くんから受話器を取りあげ、耳にあてた。

「梨利」

低くささやくと、受話器のむこうでうつと息を吸い込む気配がした。

あたしも大きく息を吸い込んで、言つた。

「⁵ 会いたい」

会いたい……。

その瞬間、露木さんの言うトランペットの音色みたいに、あたしの中でなにかがすかんと空までつきぬけた。やつと言えたその一言が心の迷いも淀みも吹きちらしてくれた。最初のひと声がだせた今なら、もうなんだって話せそうな気がする。梨利をまきぞえにしようとした一瞬の恐怖も、その後悔も自己嫌悪も、百パー セント自分が悪いとわかつてながら、それでも心のどこかでひそかに梨利をうらんでいたことも、全身全霊で求めたSOS。

ふりはらわれた右手の後遺症……。

「さくら、よく言った」

あたしが言葉を続ける前に、しかし、⁶ 勝田くんがあわただしく受話器を取りあげて言った。

「そういうことだ、梨利、水城小の屋上で待ってるぜ」

がちやん、と梨利の返事を待たずに受話器をもとにもどす。

「行くぞ、さくら」

あたしたちは勢いづいて再び自転車に飛び乗った。さらにスピードアップして勝田くんの運転で静かな街路をつきぬけていく。

まだ遠い彼方の水城小学校。月の船など現れないその屋上に、あたしたちはこのとき、いつたいどんな奇跡を見ていたんだろう？

たぶんあたしたちはどんな夢も見てはいなかつた。ただ、どこにでも転がっているごくありふれた現実を、ささやかな平和を取りもどしたいだけだった。

（森 絵都）「つきのふね」から、一部表記を改めたところがある。（

――線 1 「大変こまつたこと」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。〔 〕

1 勝田くんは自分が作ったにもかかわらず、月の船が「来ないもんは来ない」と突然開き直ってしまい、それを信じている智さんを深く傷つけてしまうという」と。

2 古文書に書いてある「月の船が来る」ことは、勝田くんが勝手に作ったことで、実際には来るはずもなく、智さんにどう説明したらいいか分からないということ。

3 月の船は「眞の友四人が集いしそのとき」に現れるのであって、今の段階ではあたしと勝田くん、智さんの三人しかおらず、あと一人眞の友が足りないということ。

4 智さんは、「月の船が来る」ことを本当は信じていないのだから、水城小学校にいることもはつきりと確信が持てず、このまま向かっていいのか分からぬということ。

115

120

125

――線 2 「勝田くんはゆずらなかつた」とあるが、そのときの「勝田くん」の気持ちとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 古文書に書かれたこの機会を逃すと、さくらと梨利が関係を取り戻せなくなると確信し、さくらにどうにかして謝らせたい。

2 真の友四人を集めなければいけないことを口実にして、一方的に拒否されている梨利との関係を何としてでも修復したい。

3 古文書をきっかけに、さくらと梨利を仲直りさせ、智さんを含めた四人の以前のような良い関係をどうしても取り戻したい。

4 古文書に月の船が来ると明らかにたらめを書いてしまったので、眞の友四人までそろわざ全てがうそになることは避けたい。

――線 3 「梨利の反応はにぶかつた」とあるが、梨利の気持ちの説明を、次の条件を満たし、全体で五十五字以上六十五字以内の一文で書きなさい。

書き出しの〔 梨利は、 〕 という語句に続けて書き、文末は〔 〕で終わること。これらも全体の字数に入れること。

――線 1 「大変こまつたこと」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。〔 〕

1 勝田くんは自分が作ったにもかかわらず、月の船が「来ないもんは来ない」と突然開き直ってしまい、それを信じている智さんを深く傷つけてしまうという」と。

梨利は、

(二)

——線4 「あたしは勝田くんから受話器を取りあげ、耳にあてた」とあるが、その理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 勝田くんの説明の仕方では梨利を余計混乱させ、時間だけが過ぎていくので、自分が直接説明しようと思ったから。
- 2 智さんを救い出すにはどうしても残り一人が必要で、自分が謝り頼めばきっと受け入れてくれると思ったから。

- 3 勝田くんが梨利に言つた言葉が、自分の心にも響き、意地を張らずに素直な気持ちを伝えようと思ったから。
- 4 勝田くんの返答から、梨利が謝りたいと思っていることがわかり、勇気を出して受け入れようと思ったから。

(才)

——線5 「会いたい」とあるが、ここで「あたし」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 自分のなかの梨利に対するわだかまりが消え、ただ素直に気持ちを簡単な一言にたくして伝えようと、力強くゆっくりと読む。
- 2 今まで自分の心の中にため込んでいた梨利への不満の気持ちをすべて吐き出すように、一気に言い切るようにして読む。
- 3 自分のことを本当に受け入れてもらえるのか不安をぬぐいきれないながらも伝えようと、言葉の語尾が消え入るように静かに読む。
- 4 素直な気持ちを梨利に伝えると決めたものの、まだ迷いが残り、それを打

(力)

——線6 「勝田くんがあわただしく受話器を取りあげて言った」とあるが、そのときの「勝田くん」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 梨利がさくらの素直な気持ちを受け止め、実際に水城小学校まで来ることに確信を持っているため、あえて返事を聞かないことで、実際会ったとき二人の仲がより深ると考えている。
- 2 さくらが梨利とのわだかまりを解き、思いを伝えたことに安心を覚えているが、二人が会話を続けていると時間が過ぎてしまい、満月が雲に隠れてしまうかもしれないで、慌てている。

- 3 さくらと梨利が長く会話を続けると、再び言い争いになり、せつかくの打ち解けあうきっかけが台無しになつてしまふと考え、実際に会つて三人でゆっくり話をしようと考えている。
- 4 さくらが梨利に本当の気持ちを素直に言えたのはうれしいが、あくまで古文書に書かれた場所に四人が揃うことが必要だと考えているので、会話を通り、梨利に来るようだけ伝えていく。

(キ)

——線7 「たぶんあたしたちはどんな夢も見てはいなかつた」とあるが、それを説明した次の文の□に入れる語句を、これよりまえの本文中から十字で抜き出して書きなさい。

古文書のとおりに、□という奇跡を期待しているのではなく、ただ四人が以前のように仲良く、いい関係を続けていけることだけを望んでいるということ。

ち消そうと、自分に言い聞かせるようにして読む。